

農本連盟の歴史的位置とその思想——農本イデオロギーと「地域社会」構想

はじめに

図序2に掲げたとおり、農民自治会が事実上解体した一九二八年は農本思想史・運動史上第一の象徴的な年である。帰農が日本的近代に対してもつていたインパクトが薄れ、逆に農本連盟に結集する人々の活動が活発化するからである。そして第二の象徴的な年が農村窮乏が声高に叫ばれた一九三二年、この年に農本連盟が結成された。

この農本連盟という農本主義者の団体は多様な思想傾向の雑居団体であったが、従来反都会・反商工業・反資本主義・反中央集権的傾向が農本イデオロギーとして強調されすぎたきらいがある。この規定が誤りだというわけではないけれども農本連盟を母体とするその後の運動にまで目配りをする、本質はそうしたイデオロギー的側面にあるというよりも、むしろ新たな「地域社会」創出の構想にあったと思われる。

本章はこうした観点から、農本連盟を中心とする諸動向に注視するなかで、昭和恐慌期の「社会」創出型」農本思想の特質を考察していきたい。

第一節 昭和恐慌期の農村

一、農村窮乏の実態

一九三二年六月五日、農民請願運動が世間の耳目を集めるなか、長野県長野市・上田市ほか北信九郡の小地主・自作農の代表者一四名が上京、後藤文夫農相、有馬頼寧政務次官を訪問し次のような「農村哀話」を訴えた。⁽¹⁾

こんな年寄りが何も態々出てこなくても良いやうなものが、わし等でさへもうちつとして居られませんのでね、わし等の方の百姓はもう働く甲斐もなくなりましたですよ、金を借りることも税金を納めることも出来ない、ほんとうにどうして食うて行けるか、それだけなんです、金融機関などと云ふものは銀行も質屋も全くないと同様なものです、税金などは二年位滞つてゐるのは当り前のこととして居ります、可哀さうに学校の児童も持つて行く弁当がありません、あつても馬の食ふ、フスマなんかを持つて行くやうな有様で、欠食児童の数は一村平均四十人を数えてゐます、先日も或家に泥棒が入つて、^すを盗んだのが捕はれたところ、其の犯人の家では一家族で暮らしてゐると云ふ話で、捕へた巡査も思はず涙ぐんだと云ふことでした。それで小学校の先生方も勿論お給料の払へる訳がありません、僅かに時々五円とか十円とか渡して勘弁願つてゐるやうな始末です、又こんな話もあります、或家で亭主が留守で家内が留守番をしてゐた処が、僅か十七円五十銭ばかりの金を差押へに來たので折柄妊娠してゐた女房は驚いて流産して了つたといふことです、全く笑ひ話どころぢやありませんよ、米屋さんなんかは米を売るのが恥しいので夜の十二時頃から店を開けるものがあります、可愛い娘は女工に出ても労賃が貰へませんし、子供は飢ゑに泣かせねばなりません。政府で失業者が四十万とか五十万とか云つてゐられるのは嘘です、今日かうして食へない人間があるのは、これみんな失業者と云つて良

いと思ひます（読点は適宜補充）。

こうした状況は全国的なものであった。たとえば「農家の人妻が余りに窮して貞操の切売をしてゐる」、「椎の実の生食ひをしてゐる、何故煮て食はないかと問へば、煮食すると食過ぎて夏に食物の出来るまで足らなくなる恐れがあるか

ら」だ、あるいは「芋食も出来ず漸次蘇鉄の実を常食とするもの増加し、従ふて小学児童の如き宛然ウキターミンの欠除せる鼠の様な容貌をしてゐる」、といった悲惨な状況が全国各地から報告されていたのである。⁽²⁾

昭和恐慌にもなうこうした農村の窮乏は、一九三二年五月の五・一五事件により世間の耳目を集め、さらに六月に入ると農民請願運動が新聞紙上をにぎわし、それまでジャーナリズムに無視されてきた農村への関心を一気に高める結果となった。各雑誌はこぞって農村問題の記事を掲げるようになる。しかし農家経済の困窮は昭和恐慌にはじまったものではなく、すでに第一次世界大戦後の慢性不況下において進行していたのであった。

一九二七年度農林省農務局の農家経済調査によれば、「中等以上の優良農家」である自作農（七〇戸平均）、自自作農（五六戸平均）、小作農（五五戸平均）の農家余剰（＝農業総収入－農業経営費＋家計費）はそれぞれ二二四・九円、一九九・九円、一七三・八円で、いずれも農業総収入だけでは農家経済を維持できない現実が指摘されている。⁽³⁾ かくうじて農家経済を支えていたのが農業外収入であった。したがって昭和恐慌による農業外収入の途絶ないし激減は、まさに農家を飢餓線上にさまよわせるものであったといわねばならない。

しかも農家家計費は極度に切り詰められたものであり、生存のための費用が家計費全体の六〇七割を占め、たとえばその中の食費は一月一人当たり自作農六円、自自作農五・六円、小作農五・五円、一日に換算すれば一人当たりわずか一八〇二〇銭程度にすぎなかった。⁽⁴⁾ ちなみに一九二九年、東京浅草地下鉄食堂のライスカラーが二五銭であったことを考えれば、⁽⁵⁾ これらの数字がいかに低いものであったか明らかであろう。しかもこれは、昭和恐慌以前の「中等以上の優良農家」の数値であるから、多数を占める貧農の実態は推して知るべしである。

したがって、生活の余裕などまったくなく、教育費や嗜好費、娯楽費はいうまでもなく、保健衛生費さえ削られるだけ削らざるをえなかった。このため農村衛生は次に見られるような悲惨な状況を呈していたのである。⁽⁶⁾

貧農になると、殆ど蒲団といふものをもたない。その寝床は常設的なもので光線のまるではいらない、暗い部屋に藁を敷いてそ

の上檻を過ぎ合はした黒い敷布をつかけてあるに過ぎない。その中へ寝床があるのだ。

自然が美しい、百姓は清新な空気を吸ふて土に親しむなどと、寝言みたいなことを今でも宣伝したり、考えたりする馬鹿者があ
るが、事実は、百姓の生活が都市生活者よりも遙かに不健康で疾病者が多いのだ。新潟県で行つた六十八ヶ村、農村男女十三万八
千四百六十二名の健康診断の結果をみるに、疾病数廿一万四千三百三十七名、一人平均一・五五の比率であるから、農村男女は一
のこらず病氣をもつてゐるわけだ。

農家は恰も寄生虫の巣である。演説会などあつて、蒲団のある農家へとまつてさへ、白いワイシャツが虱で鼠色になるといふ
は決して過言ではない、二三日巡回講演などするときは、我々の仲間て虱の村別が始まる位である。

このように第一次世界大戦後の慢性不況下に進行し、さらに昭和恐慌が追い討ちをかけた農家生活の窮乏は、小作農
のみならず自作農（および地主層）を没落させたことで、小作問題ではなく新たに「農村問題」を惹起した。⁽⁷⁾

その原因は、端的にいえば、農産物価格の暴落、農業外収入の激減および都市過剰労働力の農村還流（帰農）、多額の
負債、農村金融の枯渇、生産資金の欠如、公租公課の過重負担等を指摘することができる。たとえば、農産物価格の下
落率は四八%にも及んだのに対し、農村必需品（農村用生産物）価格の下落率は三二%にとどまるといふ⁽⁸⁾ 状況価格差（シ
ェール）が、肥料代・飼料代等生産資金の不足を招き、その結果農家経済をいつそう圧迫することになった。⁽⁸⁾ かくして
農家負債は総額五〇億円（農家一戸当たり八〇〇円）にものぼると報道されたのである。⁽⁹⁾

二、都市・農村不均衡論

このような農村の窮乏は、いきおい都市との比較で語られることになる。よく取り上げられたのが、農村における公
租公課過重負担の指摘である。

一九三一年度の帝国農会「農業者ト営業者ノ租税公課負担比較調査」によれば、たとえば年間五百円の所得層におけ
る租税負担は、地主五一・五%、自作三四・一%、小作一〇・四%、物品販売業一二・三%、物品製造業一四・四%で

(その他の所得層でもほぼ同様、地主および自作農は同所得の営業者に比して三〜四倍程度の高負担であったことがわかる(なお小作農の軽課は五割強におよぶ高率小作料の負担を考慮すれば決して少ないとはいえない)⁽¹⁰⁾)。この原因は地方税および公課(農会費、協議費、水利組合費、水害予防組合費など)の重課にあったが、農民の怒りは自転車、荷車、リヤカー、牛馬等の生産手段にまで税を課し、また酒や煙草の自家製造を禁じたうえ重税をかけるという、貧農いじめに向けられていた。⁽¹¹⁾

また農民と都市住民との所得不均衡も問題とされた。一九二九年、浜口内閣において官吏減俸案が提出されたが、「その官吏減俸案(月給百円以上)が、下級俸給者の生活を脅かすと云ふ名に於て都市人の激烈なる反対を購ひ、遂に周知の如く撤回せられた。その結果は、然らば、それよりも遙かに収入僅少なる農民に対しては、どうして呉れるのだ、と云ふ疑問を、全国農民の上に、大規模に投ずること、なつた。而して、この疑問は、単に、農民対俸給者の所得に對してのみでなく、農村対都市住民全体に對する疑問である。何となれば、都市に於ては、月収百円内外(田舎に於ては、それは中以上である)の者すら下級生活者である程、それ程、その他の者の収入は多額であるからだ」(括弧内原文)。

しかし、都市との比較における農村窮乏論はたんに経済問題ばかりではなく、政治的・社会的・文化的不均衡の問題でもあったといわねばならない。とりわけ切実な問題であったのは文化的な不均衡である。文部省社会教育局の娯楽調査(一九三三年)によれば、農山漁村では映画が圧倒的人気を占め、次いで盆踊りが愛好されており、総じて「都会娯楽の勢力の澎湃しつゝ、あるを知る」と報告されている。⁽¹²⁾しかしそうした「都会娯楽」は僻村になればなるほど接する機会が少なく、情報の流入とともに娯楽機関が充実した都会との不均衡として自覚され、また青年男女の都会流出の原因となつたのである。

こうして農村の窮乏は、同時に都市・農村不均衡問題として浮上し、また「商工立国政策」が批判されるに至つた。⁽¹⁴⁾

都市の住民は、何故に、農村に比し斯く生活程度が高いか。(中略)その根因は、要するに、社会的施設、國家の費用を以てな

す事業、その他のあらゆる政治経済的設備が、農村の犠牲に於て、都市人に「不勞所得」を与へることになるからだ。例えば、國家の費用で軍備を拡張する。さうすると徴兵と租税との大部分は農村の犠牲だが、そのため、都市は、兵營、砲兵工廠、海軍工廠等の設置に由つて、莫大の利益を得る。官衛学校の施設皆さうでないのはない。港湾、鉄道等の建設又さうだ。

このような批判は、しかし左右のイデオロギー対立を越えて、かなり広範に見られた見解である。そしてこうした動向は、一九二五年、農商務省から農林省が独立したことに端的に示されていた。農林省独立時の雰囲気は、「農業(農林省)というのはいちばん大事な国の本なんだ。商工業というのはその上にあるんだ」と、意識的に農林行政の独自性をいうために⁽¹⁶⁾、また「社会政策的な農政を展開するためにも、『農業は国の本である』ということをおいねばならなかつた」(括弧内原文)と、農本論の空氣に満ちあふれていたといふ。

こうした都市・農村不均衡論は、いわば都市民による農村への同情という心情に支えられたものであつたが、この背景には一九一〇〜二〇年代にかけての急激な都市化の進展があつた。農林業人口(推計)は一九一一年の約一六二万人から二〇年後の一九三〇年には一三四九万人と約二六〇万人(約一六%)もの減少を示している。⁽¹⁷⁾この結果、人口一万人以下のいわば町村部総人口の全人口に對する比率は、一九一三年の七四・二%から三〇年には五六・九%に減少し、逆に人口一〇万人以上の都市部総人口の比率は一九一三年の二一・五%から三〇年には二三・五%へと二倍近い伸び率をみせることになつたのである。⁽¹⁸⁾したがつて当時、都市民の少なからぬ部分が農村からの流出人口であつたし、二世代遡れば多くが農村出身者で占められていたといつても過言ではあるまい。⁽¹⁹⁾

こうして昭和初期の都市においては、農村出身者を中心に、故郷への郷愁から没落する農村への同情が満ちあふれていた。たとえば冒頭で紹介した長野県の陳情団に對し、東京では「無名の激励者(が)続出」したことが報道されている。⁽²⁰⁾ことに同郷長野の「一無名青年」が、「故郷を思ふ切々の情」を訴えた「感謝の手紙」を「同情金」を添えて送つたことが紹介された。以下はその「感謝の手紙」の一部である。

(皆様方のご苦労を新聞で読み)本朝の御飯は味がありませんでした、かうして暖かい御飯をいたゞいておられる身が勿体なくて涙が出て仕方ありませんでした。私の郷里は去年から今春にかけて、相次いで亡くなりました私の父母祖先、それらの人々が共に生活して居られた故郷の人々がフスマを食べて居るとは何と申訳ない事でせうか、私共が東京に出て何とか働いて居られるのも故郷の人々があの美しい大自然を守つて居てくれるからです。幼年時代の信州の山川風木の感化なくしてどうして信州人の気魄が生まれませうか? 然も昨今の疲弊の有様は聞くも涙の極みであります、何とか力の及ぶことをいたし度いと考へます(後略)。

だがこうした事実は、単純に都市⇨富裕/農村⇨貧困という図式にならぬことはいまでもない。都市の貧困問題は、たとえば「ルンペン」「大学は出たけれど」(一九二九年の小津安二郎の映画)などの流行語とともにクローズアップされた都市失業問題にあらわれている。失業者は一説には二〇〇万人とも三〇〇万人ともいわれ(内務省社会局の失業統計では約三八万人)、一九三〇年五月時点での大学卒業生の未就職率は四一・九%にもほつていた。⁽²¹⁾日本経済のいわゆる二重構造は戦間期に形成されはじめ、農業問題とともに中小企業労働者の大企業労働者との賃金格差が開きつつあった時代である。実際、失業者として計上されなくても、不安定な都市雑業層に吸収されている人々は少なくなかった。それが次のような当時の新聞記事の見出しにもあらわれている。⁽²²⁾

農村救済の声に覆はれて 忘れられた小市民層 貧窮のドン底に喘いで没落への道を辿る この生活苦悩を見よ。

したがって柳田国男が指摘していたように、「都市の窮乏と不安が量においても質においても、決して多くの村落に劣つていな」⁽²³⁾かつたのであるから、都市・農村不均衡論をその複雑な内部構造を無視して総体としての絶対的対立論、さらには搾取論に直結させることはあまりに単純すぎるであろう。だから柳田は同書『都市と農村』(一九二九年)において、日本の都市は「農民の従兄弟」⁽²⁴⁾によってつくられたことを強調し、都市による農村迫害という指摘に対しては次の事実をもって批判していた。第一にそれは資本家の企てであり多くの都市民はあずかり知らぬこと、第二に農村人での企てに参加した者もいると。また同様に、農村への同情を有する農業経済学者の那須皓(東京帝大教授)も「農業と商

工業、又は農村と都市とは、全体としては依存的相助関係にあ」⁽²⁴⁾るとして、都市・農村対立論を批判していた。

もつとも都市・農村不均衡論と都市・農村対立論(搾取論)とは、実際においては明確に分離できる性格のものではない。この点は理論社会学者・経済学者の高田保馬の言説に明瞭にあらわれている。彼は『経済往来』(一九三一年五月)に発表された論文「農村の人として」で、没落する農村(九州福岡県の故郷)への深い哀愍の情と、逆に農村を圧迫する都市・商工業への強い憤りにささえられて、「経済の道」ではなく「政治の道」による農村再建を望む。すなわち「第一歩として先づ農村をして都会と同一なる公課の負担を担はしめよ。更に進みて、都会の余剰を以て農村の栄養を補給せよ。これ以外に農村の救はるる道はない。着眼ここに及ばざる識者の見方はすべて商工資本主義的利益に囚はれたるものであると云ひたい」と、いわば農本感情を前面に押し出した議論をしたのであった。高田はのちに自らの理論社会学の基底にこの農本感情がひそんでいたことを告白している。

社会の進展の前路に私はいつも利益社会化の姿を想望した。それにも拘らず、私は魂に於て望郷の子であり、農村の子である。それだけに共同社会的なるもの、人情淳朴の村落生活にあこがれをもっている。生馬の眼を抜くといふ都会の生活のさ中⁽²⁵⁾にありながら、私の心はたえずゲメインシヤフトを求めている。

こうして都市・農村不均衡論は多様なバリエーションをもつて展開する。がしかし、少なくとも農村窮乏の問題は、都市の貧困問題を見過ごさせてしまうほど圧倒的迫力をもたない時代⁽²⁶⁾の前面に登場したのであった。昭和恐慌期の農本思想とその運動はこのような空気⁽²⁷⁾の存在が基盤となっている。

第二節 農本連盟の結成

一．日本村治派同盟

昭和恐慌による農村の窮乏が深刻化していた一九三二年一月、「左翼農民組合運動とその理論と方向性を異にした文明批評的・アナキズム的・農民自治的傾向の団体の代表、思想家・評論家・学者・作家」⁽²⁶⁾らが結集して日本村治派同盟（以下、村治派と略記）⁽²⁷⁾がつくられた。村治派は中国「北支」⁽²⁸⁾で梁漱溟^{リヤウシュンミン}（一八九三—一九八八）が指導していた村治運動（郷村建設運動）を模範に、とりわけ津田光造の奔走によって下中弥三郎、口田康信の協力のもとに設立した団体であった。⁽²⁸⁾ 村治派の標語、綱領、創立発起人は以下のとおりである。

標語 一．唯物文明の超克

二．農本文化の確立

三．自治社会の実現

綱領

一．農業を本として経済組織を改革する。

二．自治村落を単位として連合組織を構成する。

三．村塾を立てて農村文化建設の基礎とする。

創立発起人

大田卯、今関寿麿、岡本利吉、加藤一夫、風見章、橘孝三郎、高須芳次郎、辻潤、土田杏村、津田光造、長野朗、室伏高信、武者小路実篤、村井弘侑、口田康信、古谷栄一、権藤成卿、雨谷菊夫、下中弥三郎、森田重次郎、矢部周

創立発起人を見ても、多様な思想傾向をもつメンバーが参加していることは明らかである。なかには名前だけ貸した人もいると思われるが、しかしこうした思想の雑居性が内部対立を生むのは当然である。長野朗によればとりわけ村治

派創立に熱心だった津田光造の唯心的な農道論と、当時農村青年共働学校を通して多くの弟子を育てていた岡本利吉の唯物論とが対立したのだという。

ともあれ村治派は何ら活動をしないまま、今度は岡本利吉が中心になって再組織化に動くなかで自然消滅した。岡本は「共働理想であるが、まだ実現しない。だから、共働連盟と言うわ、大同団結にふさわしくない。自治連盟と云うもよいが、自治消極的であるから、我等の集りを農本連盟期成会と名づけることにする」⁽²⁹⁾として静岡県駿東郡富岡村の農村青年共働学校内に農本連盟期成会を組織し、農本連盟結成のための全国協議会を準備したのであった。

二．農本連盟

こうして成立した農本連盟は「真の農本主義者の自由連合の運動団体」⁽³⁰⁾であり、岡本をはじめ権藤成卿、長野朗、橘孝三郎、大田卯、加藤一夫、和合恒男、中沢弁次郎らを糾合した。

村治派同盟の中の真の農本主義者が一先づ連合し、更に他の農村的傾向の人達も誘って、農本連盟へと急速再組織をなし、それを中心として、⁽³¹⁾今後より、一層積極的に、農本主義的社会運動を、理論的にも実践的にも、純粹に、客観的に進めてゆかうとしたのである（傍点原文）。

そして一九三二年三月二日から三日にかけて、東京芝協調会館において農本連盟全国協議会が開催された。参加者は北は山形から南は福岡まで総勢八三名に及んだが、農本連盟が岡本主導によって創られたように、参加者の半数以上（確認できた者だけでも八三名中四五人）は岡本利吉を校長とする農村青年共働学校卒業生ないしは関係者であった。⁽³²⁾

同協議会に参加したある共働学校第五回生によれば、政治運動の是非をめぐる思想対立のため非常に緊迫した様子が漂っていたという。⁽³³⁾じっさい前年一九三二年は三月事件、十月事件の軍部クーデター未遂事件に加え、九月一八日は関東軍による満州事変が勃発、三二年に入ると二月九日、前蔵相・井上準之助が、さらに協議会終了二日後の三月五

日には三井合名理事長の団琢磨が血盟団員に射殺されるというテロが発生し(血盟団事件)、内外をめぐる政治状況はきわめて緊迫していたのであった。また同協議会に橋孝三郎は欠席していたが(代理として側近の杉浦孝が出席)、この時点ですでに五・一五事件への参画が決定されており、最初から農本連盟は分裂の原因を内包していたのである。

常務委員には、犬田卯、石田清志、星川清躬、岡本利吉、和合恒男、加藤一夫、川島巖、橋孝三郎、中沢弁次郎、永田新司郎、長野朗、松本清、安藤重信、森田重次郎、白山秀雄、杉浦孝の十六名が、そして書記長には山川時郎が、顧問には権藤成卿が選出された。ここにも岡本派が多数をしめている。星川清躬、川島巖、永田新司郎、松本清、白山秀雄、山川時郎⁽³⁴⁾がそうであった(石田清志は不明)。

このほか農本連盟の人脈は、大きく分ければ(一)橋孝三郎派(杉浦孝)、(二)長野朗派(和合恒男、安藤重信)、(三)岡本利吉派(前掲)、(四)犬田卯(「農民」派(加藤一夫)の四つの勢力が存在していた(中沢や森田も岡本に近かったといえる)。そして、これら四派勢力の上に大きな影響力をもっていたのが、権藤成卿である。数的には岡本派が突出していたが、しかし長野、岡本、犬田、加藤らは相互に交流をもち、また橋は長野らと交流があったように、この時点では表面的ではあれ友好関係を保っていた。だがまもなく政治進出をめぐって政治運動派と非政治運動派とに分裂する。便宜的に分類すれば、(一)(二)は政治運動派、(三)(四)は非政治運動派であった。

農本連盟に結集する各派の運動史は図序2を参照していただきたいが、橋、長野、権藤、岡本らのそれが個人を中心に単純であったのに対し、「農民」派に関しては農民自治会の流れから非常に複雑である。しかも反都会・反商工業・反資本主義など、農本連盟の共通理念の基底を担っていたと思われるので、以下やや詳しく「農民」派の運動史とともに思想に関しても考察してみたい。

「農民」派の運動と思想

農民自治会から「農民」派へ 「農民」派の基盤となった農民自治会(以下、農自と略記)成立の一般的社会背景は、日露戦争以降の反都会主義的傾向にあった。

繰り返すように、一九一〇―二〇年代は都市化が急激に進展する。農村の慢性的不況を尻目に華やかに栄える都市文明。それは都市の貧困問題(都市問題)を覆ってしまった直感的で単純な認識ではある。しかし一九二三年九月一日に帝都を襲った関東大震災(マグニチュード七・九、死者・行方不明者一四万人、被害総額六〇億円)が、都市文明への鉄槌として反都会主義的思潮を一部でさらに煽り立てる結果となった。その風潮は、シュペンゲラー『西洋の没落』(一九一八―二二)に触発されて書かれた室伏高信の大ベストセラー『文明の没落』(一九二三年二月)がよくあらわしている。同書は次のように問題提起する。⁽³⁵⁾

小作人を直接に搾取するものは、勿論地主であらう。地主だけが小作人の搾取者であるか。自作農は何故に貧しいか。田園に米麦よく実つて農村の疲弊すると云ふのは何故であるか。

室伏によれば都市こそがその原因である。つまり都市は農村を搾取する。そしてこう結論づけたのである。

都市は吸血鬼である。世界都市は世界的吸血鬼である。都市は農村の血をす、らねばならぬ。

こうした一般的背景にあつて農自は成立する。しかしより直接的には帰農の流れ、間接的には農民文学運動の流れとアナキズム運動の流れの三潮流の影響を受けている。帰農については第一部で詳述したので、ここでは第二、第三の流れにふれておく。

農民文学運動は、一九二二年一〇月、神田明治会館でおこなわれたフランスの農民作家シャルル・ルイ・フィリップの十三周年記念講演会に端を発する。⁽³⁶⁾この講演会は「それ迄徹頭徹尾都市的であつた日本の文芸をして田野へ地方へ

と振向かされる公然の起点となつた⁽³⁷⁾。その結果、思想傾向を同じくする吉江喬末、中村星湖、椎名其二、石川三四郎、大田卯などによって農民文芸会の基礎が創られ（一九二三年三月頃）、一九二六年秋には『農民文芸十六講』を出版、翌二七年一〇月からは機関誌『第一次 農民』を発刊して農民文学運動は活発化していった。農自との関係は密接であり、農自主催の研究會、講演會には農民文芸會からも講師を招聘しているし、両者を兼ねた會員も少なくなかつた。

他方、アナキズム運動の流れ自体は直接農自に影響を与えたわけではないが、その組織論や思想において影響力をもつた。アナキズム運動が勃興しはじめるのは大正期に入ってからである⁽³⁸⁾。大正中期には、各種アナキズム系労働組合が結成され、大杉栄の人間的魅力と相まってアナキズム系労働運動の隆盛期が現出した。しかしロシア革命の成功によってマルキシズム（ボルシェビズム）が台頭しはじめると、アナキ系労組とボル系労組とが対立の兆しを見せはじめた。その結果、一九二二年九月の両者合同をもくろむ全国総連合大会は決裂に終わり、ここにいわゆるアナ・ボル対立は決定的になる。その後、大杉栄の虐殺（一九二三年九月）をへて普選法が公布されると（一九二五年五月）、マルキシズムの隆盛に比して政治運動を否定するアナキズムは凋落の一途をたどっていった。こうした衰退を挽回すべく、アナキ系労組最初の全国連合である全国労働組合自由連合會（略称・全国自連）が結成されたのは一九二六年五月のことであつた。

農自はまさにこうした時期にあつた一九二五年二月、下中弥三郎、石川三四郎、中西伊之助、大西伍一、川合仁ら「在京知識人」と埼玉の「實際農民」渋谷定輔や長野県の開拓農家出身・竹内園衛（愛国）らによって設立された農民自治文化団体であつた。

以下に農自の標語・綱領を掲げておく⁽³⁹⁾。

- 標語 一、農民自治の精神に基き農民生活の向上を期す。
- 二、協同扶助の精神を以て友愛の実を挙げんことを期す。
- 三、都会文化を否定し農村文化を高調す。

綱領

- 一、農耕土地の自治的社會化
- 二、生産消費の組合的經營
- 三、農村文化の自治的建設
- 四、非政党的自治制の実現

しかし当初からすでに分裂の危機を内包していた。「在京知識人」と「實際農民」との対立である。というよりも農自はアナキズムの影響を受け、地方団体の自主性を重視した自由連合論をとつたから、全国連合はたんなる連絡機関にすぎなかつた。農自成立時において會員は全国で約一万二千人程であつたというが（實際運動は長野県と埼玉県の一部しかおこなわれなかつた⁽⁴⁰⁾）、その大部分が「實際農民」もしくは地方の共鳴者であつた。機関誌『農民自治』（『自治農民』を第二号より改題）も「在京知識人」による観念論はほとんど掲載されず、「實際農民」主体の雑誌であつた。地方會員からの便り、各地農村雜記、地方連合の運動狀況報告などが誌面の大半をしめている。そしてこうした組織形態・運動形態こそが、創立発起人となつた「在京知識人」たちを排除してしまう結果となつた。

運動は一九二七年に入ると方向轉換の兆しを見せはじめ、同年夏から秋にかけて過激な闘争団体と化していく。「農民自治」第一号（一九二七年八月）には「在京同志の態度を確立すべく」成立したばかりの「在京同志會」の解散を報じている。「農民自治」第二号（一九二七年二月）には、全国連合の主要人物・竹内愛國が思想的恩師であつた江渡嶺の非政治的な個人的帰農生活に疑問を投げつけ（「江渡さんと私」）、また観念的思想運動から實際的組合運動への轉換が叫ばれた（小山敬「智的遊戯を捨てて」）。こうして「在京知識人」たる石川三四郎や江渡嶺が農自から排除されていくのである。

さらに二八年に入ると従来否定してきた政治運動を「非政同盟」の結成という形でおこない、農民の即時的開放をめざした日常闘争が主体となつていった。農自の組織も再編され、一九二八年五月には新たに農民文芸會の鐘田研一を

研究部に、犬田卯を文芸部にすえて陣容の立て直しをはかる。⁽⁴¹⁾『農民自治』第一七号(一九二八年六月)には「『農民自治』を『農民』と改題 大 飛 躍!!」という見出しのもと、「農民文芸会発行の『農民』は次号より農自の手に継承され『農民自治』と合併、農自の読物として同志の手許に届く」と報じた。農民文芸会は内部分裂のため自壊し、一部の者を除いて農自と合流、新たに農自文芸部として再出発することになったのである。

ところが予告に反して、八月五日には『農民自治』第一八号と『第二次 農民』が同時に発行されている。『農民自治』は実際運動機関誌の役割を担い、『第二次 農民』は文化運動の機関誌であつたらしい。⁽⁴²⁾しかしまもなくすると、中西伊之助が無産大衆党の発起人会に出席したという理由で農自から除名され、竹内愛国もこれに続くという事態が生じた。さらに渋谷定輔も脱退を表明し、ここに農自は事実上解体したのである。こうして『農民自治』は一八号をもって廃刊の止むなきにいたり、『第二次 農民』もわずか二号で終刊を迎えてしまった。

一九二八年という年は、このように農自が解体した年であり、また日本農民組合(日農)が全国農民組合(全農)に再統合された年でもある。大正期のように帰農思想を基盤とする一種の文化運動は時代の潮流に合わなくなりつつあった。象徴的にいえば、この年を転機として大正期の帰農思想(△自然▽委任型)農本思想は没落し、代わって昭和恐慌期の「△社会▽創出型」農本思想に結集する動きが活発化する。岡本利吉の農村青年共働学校(一九二八年)の経営であり、橋孝三郎の愛郷会(一九二九年)や愛郷塾(一九三一年)の結成であり、「農民」派の再組織化(全国農民芸術連盟、一九二九年)であり、また長野朗の『農村新聞』の発刊(一九三一年)などである。こうして一九三一年の最盛期にむけて「△社会▽創出型」農本思想は活発化していくのである。ただ権藤成卿だけはこうした潮流とは無関係に、すでに一九二〇年に処女作『皇民自治主義』を出版し、また同年、自治学会を組織していた。

「農民」派の思想 それでは農自の系譜をひく「農民」派の思想的特質は何だったのか。

そもそも「農民」派は、雑誌『農民』⁽⁴³⁾に依拠したグループの総称であり、『農民』は第一次から第五次まで断続的に刊行された(一九二七年一月～三三年九月)。同派の中心人物は犬田卯(二八九一～一九五七)、鐘田研一(二八九二～一九六九)、加藤一夫(二八八七～一九五二)⁽⁴⁴⁾らで、彼らの共有思想は一九二九年四月に結成された全国農民芸術連盟(第三次農民)、一九二九年四月～三三年一月)によって明らかになった。それは「農民自治主義」であり、『第三次 農民』(一九二九年二月)に「農民自治主義の研究手法」と題して発表された。

同論文によれば、農民芸術とは、「趣味」として味わつたり楽しんだりすべきもの(いわゆる農民娯楽)でも、「従来」の郷土文芸や田園文芸のやうに、地方の伝統とか、風習とか、色調とか、自然美とかを純客観的に描いただけのものでもないし、「土に還れ」と云ふやうなプッチ・ブル的イデオロギイに基づいて構成されたものでもない。それらはすべて「偽農民芸術」にすぎない。「農民を解放し得る者は、農民自身である。自らを自らの手で解放するために農民は闘争しなければならぬ。かゝる闘争過程にある無産農民階級の意志と感情とを表現したのが、我々の農民芸術」であり、その「一つの理論的根拠」が「農民自治主義」なのである。

かゝる農民芸術の唯一の理論的根拠である農民自治主義は無産農民階級の独自の社会的地位、経済的地位を言ひ現はした、一個の体系的階級理論である。それは労働者自治主義をも合理的に包摂することに依つて、一個の体系的社會理論にまで発展し得る性質のものである。

見られるように用語や思考方法におけるマルクス主義の影響は一目瞭然である。したがって、「農民」派は自らの独自性を強調するために独自の階級論を展開する。それが農民「第五階級」論である。彼らは都会の全存在を農村搾取に結びつけることで、労働者(第四階級)さえも「農村に対しては搾取者として現れる」とみなすと同時に、農民を労働者以上に搾取された「第五階級」として規定し、この「第五階級」に依拠する「農民自治主義」は第四階級に依拠するマルクス主義さえも克服しようと主張した。⁽⁴⁵⁾この背景には古く日露戦争以降連綿と続く反都会イデオロギイがある。

都会が繁栄するのは、農村を搾取することに依つてのみだ。凡ての都会的階級——商業家階級、資本家階級は云ふまでもなく、労働者階級さへが、農村に対しては常に搾取者として現れる。凡ての都会的存在——都会文明、都会芸術、銀座、カフェ、ダンスホール、マネキン等々は無産農民の血を吸収して咲き出た悪の華だ。⁽⁴⁶⁾

したがって「労働者と農民との関係は、地主に仕へてある小間使と、地主と同時に小間使をも養つてやらなければならぬ小作人との関係に似てゐる」⁽⁴⁷⁾のであり、「無産農民的階級闘争は、それ故、都会への反逆、都会そのものの、撃滅にまで展開せざるにはゐない」と主張したのである。⁽⁴⁸⁾

しかも都市による絶対的農村搾取論＝農民「第五階級」論は、農村内部の階級闘争である地主小作農の対立をも包摂する論理として主張された。大田は次のようにいう。⁽⁴⁹⁾

農村に於ける所謂階級闘争は、普通一般に解せられてゐる様な地主といふ少数階級と小作人といふ多数階級の係争でなく、生産機能と搾取機能との（争いと見るべきである。）即ち地主といふ不勞所得階級は都市に隸属したものであり、小作労働階級はそれに対立する集団なのである。だから地主への争闘は対都会への争闘として現はれなければならないのである。

こうした認識には都市貧民層をふくむ都市問題への視角がまったく欠如している。

そもそも都市と農村をめぐる経済関係は資本主義機構の問題である。したがって、マルクス経済学に対抗して「農民」派の「労働者も農民を搾取する」という命題に説得力をもたせるには、この資本主義機構に対する独自の理論分析をおこなうべきであった。「農民」派はこの点たしかに自覚的であり、独自の経済学の必要性を主張していた。鐘田研一の「重農主義経済学（農民経済学）」がそうである。しかし鐘田の提起した「重農主義経済学」は、結局のところ農業を「原生産」、農民を最大の被抑圧階級（第五階級）にとらえ、農業生産と農村社会を基盤におき、その関連において商工業や都市の発展を提唱しすぎなかつた。この意味では「一個の体系的階級理論」でないばかりか、とうてい「一個の体系的社會理論にまで発展し得る性質のもの」ではなかつたといわざるをえない。⁽⁵⁰⁾

おそらくその理由は、「都会と農村とを絶対的対立関係に見立てた点は、マルクスの階級闘争説をその儘、農村に適用した観がある」と石川三四郎に批判されたように、思考様式におけるマルクス主義の強い呪縛にあつたからだと思われる。そもそも「農民」派に強く見られるアナキズム的理想（「土を基調として」「生産思想に立脚した、個性の自由な伸長を意味する」「自然統制の無支配社会」）⁽⁵¹⁾は、その多元主義的・相互扶助的特徴ゆえに、階級闘争といった力による理想の実現あるいは体系への構築意思を強固にもつマルキシズム的思考様式とは相容れない。にもかかわらず、アナキズム的理想と借り物のマルキシズム的思考様式とを無理やり折衷させようとしたところに、運動における矛盾・混乱がひきおこされた理由があつたと同時に、反都会イデオロギーのみが突出せざるをえなかつた原因があつたのだろう。

運動論における矛盾・混乱は、農自以来の理想としての自由連合論と現実としての統制論の混乱にあらわれていた。たとえば組織論としての中央・地方関係の理想は、「我々の機関誌『農民』は、我々の運動の性質上、全国同志全体の意志に依つて編輯されるものでなければならぬ」⁽⁵²⁾かつたのに、実際は都市インテリの指導下にあつた。またそうした矛盾に気づくと「編輯員（を）聯盟員全部といふことに」⁽⁵³⁾し、さらに「今まで『支部』といふ言葉が『本部』との対立的意味で使用されたことはないが、言葉のヒッキが悪い事は事実」⁽⁵⁴⁾なので、急速「今まで『何々支部』といったのを『何々聯合』とかへることに」⁽⁵⁵⁾というような右往左往にあらわれている。

また同連盟はアナキストが多数参加していたが、ことに「農民経済学」における農業は「原生産」か否かをめぐって鐘田とアナキスト・延島英一（一九〇二―一九六九）との間で対立が生じ、まもなく鐘田は同連盟を去り「第四次」農民」を創刊する（一九三二年一月）、農民自治協会全国連合、（三三年一月）。同様に、鐘田が去つた後も今度は大田とアナキストらが対立し、⁽⁵⁶⁾大田は農本連盟に参加することで同連盟より事実上脱退、「農本社会」廃刊後は「第五次」農民」を創刊した（一九三二年一月―一九三三年九月）。

なお延島は後に『無政府主義と農本主義——農本主義は成立せず——』（不有社、一九三二年）を自費出版する。同書で延

島は、無政府主義も農業を重視するけれど、「農本主義者の主張を以て、人類社会生活の根本原則とするには、余りに狭隘であり、認識不足である」⁽⁵⁹⁾、すなわち「農本主義は、農民運動の革命的意義を低下させるものである。農民は農本などといふ幼稚な思想によつて束縛されるには、余りに偉大な使命を持つてゐる階級である」として、『農本社会』創刊号の論文——岡本、橋、犬田、山川、加藤——を批判した。このような目まぐるしい内部対立ゆえに、イデオロギー闘争に終始するという弊害が生じたのである。

けれども、このような農村搾取論が反都会イデオロギーに向かうのではなく、むしろ産業社会批判として、独自の問題設定を構築することもできたはずである。たとえば同時代、カール・マンハイムは「機能的合理性」「実質的合理性」という鍵概念を軸に、「近代産業的大衆社会」の機能的合理化の進展の陰に潜む実質的合理性の低下、大衆の非合理性の爆発という危険性を指摘し、ファシズムにつながる問題を摘出・批判しえたのであった。⁽⁶¹⁾じつさい「農民」派でも、一部においては、このような産業社会批判を根底とした農本主義を主張していたことは事実である。加藤一夫の次の農本主義論を見られたい。

農本主義とは何であるか。農本主義とは先づ現代の社会機構が生む一つの革命的、生活態度である。それは現代文明社会の人間、機械化に対する反抗である。それは現代資本主義組織の行詰まりに於ける必然的転換としての新しい経済体系、新しい社会組織への順応である。そしてそれは、「人類の生活は価値を実現することをもつてその本義とし、かゝる生活を可能ならしむる社会は農を生活の基調としたる社会である」とする思想のうちに要約されるのである。⁽⁶²⁾

「現代文明の人間機械化に対する反抗」として単純に農本主義の主張に直結するところはたとえばナチズムとの親縁性をも感じさせるが、しかしこの問題設定自体はたんなる反都会イデオロギーとは異なる産業社会批判に向かう可能性が認められなくはない。また農本主義を「革命的な生活態度」ととらえる点など、第一部で見たように帰農から日本的近代を切断する可能性をも内包していたのである。あるいはマルキシズムが欠落させていた視点の補完として、アカデミ

ズムではいち早くチャヤノフ小農理論が紹介されたように、⁽⁶³⁾「重農主義経済学」を理論的に深める方向も存在していた。こうした幾つかの可能性をもつてはいたものの、結局「農民」派はとりわけマルクス主義へのイデオロギー闘争に終始し、また農民文学作品としてのインパクトを与えることもできなかったのである。

農本連盟の共通認識

以上やや詳しく「農民」派をめぐる運動と思想を見てきたが、農本連盟の共通認識としての反都会、反商工・反資本主義イデオロギーは同派の思想に集約されている。この共通認識は全国協議会で採択された「宣言」および「綱領」⁽⁶⁴⁾に明らかである。「宣言」はこうはじまる。

商工民を本位とする近代都市資本主義は、正に行詰りの頂点に達して、解決すべからざる混乱に直面してゐる。歴史が過去に於て嘗て経験せざる不景気や、失業や、就職難等の生活苦を都市に氾濫せしめ、農村は借金苦と、納税苦と、肥料苦等に呻吟してゐる。しかも都市商工主義に偏する政治と、学問と、教育と、チャアナリズムとは完全に農村を無視して、寄生虫の如き繁栄を都市に展開した。

こうして「近代都市資本主義」「都市商工主義」の農村収奪を強調し、来たるべき農本社会を次のように謳う。

かくして時代は変わり、新なる歴史が開始されんとしてゐる。共産主義や、無産政党や、ファッシズムや、国家社会主義や反動日本主義等々の思想が論争されてゐるが、しかし此等も都会中心の誤謬主張であり、決して農村と全人類を安定と幸福に導くものではない。こゝに農本社会の建設が新しい唯一の方法として確認される。

農本社会は我等の生活に農業が根本基礎であることを科学的に証明し、加工や、交換や、政治や、文芸や、教育等々の一切が農村の連合体によつて管理される規範の生活組織であり、この農本社会が実現すれば、土地も、人間能力も、凡ての生産要素が最も効に活用されて万人の生活は幸福となり、不景気や、失業や、就職難や、農村疲弊等の一切の問題が消滅するのである。こゝに於いて我等は農本連盟を結成し、農村人は勿論都市における各職業の人々にもこれを確認さし、真に搾取なき唯一規範の農本社会を

実現せんとす。

また「綱領」は次のとおりであった。

- 一、我等は鋏と鎌を持つ農村人の全国的結合を期す。
- 二、我等は共働と自治の精神により農本社会の確立を期す。
- 三、我等は全人類の完成と其生活を期す。

この「宣言」や「綱領」は、じつは「農村と全人類」「共働」「規範」などの用語に見られるように多数派をしめた岡本が執筆したものだと思われるが、その基盤として反都会・反商工・反資本主義的思想が明らかに見られよう。しかし「都市と農村の対立」という点に関しては、それはマルクス・エンゲルス以来の基本視角であり、マルクス主義者とともにこの視角を共有していたともいえる。

従来この農本イデオロギーが極端に強調されてきたが、農本連盟の思想の特質は同時に「宣言」にも謳われているように、農本社会という理想社会を構想し、その基盤として新たな「地域社会」を創出しようとしたことにあると思われる。

第三節 農本連盟の「地域社会」構想をめぐって

ところで、この農本社会をイメージするにあたって重要な点は、農本連盟が緑旗を掲げていたことにかかわっている。すでに農民自治会は「鋏形に牛頭、稲穂を浮出し」たマークをもつ「新緑地」の旗を会旗としたが⁽⁶⁶⁾、農本は「汎農文化社会」を構想した、この系譜を農本連盟も継承していた。だから農本連盟の書記長・山川時郎は次のようにいう。⁽⁶⁶⁾

我等は、都市労働者本位のマルクス主義の赤色戦線にもあらず、また都市労働者に甚だ有利なアナキズムの労働者・農民の自由連合の黒色戦線の立場にもあらず、即ちこれらの第一、第二の戦線の立場を超越清算して、第三戦線であるところの、農民を中心とし、農村を基本としての緑色戦線を展開する。従つて我等の旗印は、マルキシズムの「赤旗」でもなく、アナキズムの「黒旗」でもなく、農本主義の「緑旗」である(傍点原文)。

また農本青年連盟と婦人連盟の機関誌として「緑旗」を出し、岡本が経営した農村青年共働学校では「緑旗の歌」(白山秀雄作詞)が歌われていた。

緑旗とは農本自然の色を象徴するが、農本連盟においては、婦農思想のように「自然」を範型として、それが理念や運動の前面に出ることはなかった。むしろ緑色は、山川がいうように、マルキシズム(赤色)やアナキズム(黒色)に對抗する意味においてのみ強調されたきらいがある。この意味で農本連盟は、少なくとも主観的意図においては社会主義と親縁関係にある。このことは機関誌『農本社会』における次の抗議にも明らかである。⁽⁶⁸⁾

「国家主義団体」(と)とか何とかいふ本を見ると、我々「農本連盟」の同志も、その中へ数へ□□□□てしまつてゐる。著者は□□□□人で、どこであの材料を得られたか分らないが、無責任も甚しい。我等は、こゝに嚴重に抗議しなければならぬ。所謂、右翼——国家主義——我々のどこにそれらと共通した主張があるだらうか。少しは我々の機関誌、行動でも見てから、何かいふならいふがよい(括弧内原文、□は不明)。

この抗議が書かれたとき、すでに政治運動派は農本連盟から分離し、岡本も先駆者同盟を組織し独自の活動をおこなっていた。農本連盟は国家主義団体という定式はおそらく権藤や橘の存在が大きい、中心人物の権藤でさえその実態は、民衆の相互契約に基づく生存圏が確保された新社会(社稷)創出をめざしたように、むしろ社会主義との関係において把握すべきなのである(第5章第二節参照)。

こうして彼らは農民が主導する「真に搾取なき」農本社会を、労働者主導の社会主義社会との対比で構想したのであ